

彙報

●史學研究會

例會

九月二十一日午後一時より樂友會館樓上に於て開催、左の兩君の講演あり、午後五時閉會した。

神社ミ演藝

文學士 渡 邊 多 仲君

主として關の清水の蟬丸神社を中心させる江戸時代に於ける音曲諸藝道の團體の事に就いて述べ、本社は音曲諸藝道の祖神として崇敬され、此道に携はる者は本社の別當所から免許狀を得べき事となつてゐた。本社のもものは西の宮等のものよりも大規模で、其の種類は説教（人形操師、物語、狂言、旅藝人、十三香具師、通俗講談師等が之に屬する）讚語（琵琶法師、淨瑠璃語り等）勸進師（辻能狂言、辻角力、小見世物等）音曲道（白拍子、三味線語り等）などで、是れ等の地理的分布は畿内、特に伊賀に多く、東は參河、信濃、特に參河に多く、西は播磨美

作を経て備前に及び、特に備前に多く、南は四國に互り特に讃岐に多い、免許狀を出した數は安政四年十二月より文久二年四月迄に百七十二人、文久二年二月より元治元年四月迄に百二十二人あつた。是れらの藝團は本社の支配を受けて課役を納め一定の掟を守らねばならなかつた。説教は説教で一の座組を作り、座には一人の頭取ミ興行を爲す際に他ミ交渉する名代一人があり、これらの座組の取締には説教取締所があり、地方には向寄取締方があつた。音曲諸藝道に携はれる人々の社會的地位は餘りよく無かつた云々。

道明寺の十一面觀音 文學博士 濱 田 耕 作君

河内の道明寺には菅公作ミ稱する十一面觀音像がある此寺は一に土師寺ともいひ土師氏の氏寺であつたミの傳へがあるから此點から菅公ミ關係があつた事ミ思ふ。此寺の附近には奈良朝時代から寺があつた事は出土した瓦に依つて知られ、平安朝の中期末には立派な堂塔伽藍があつた事が諸記録によつて知られる。此の觀音像は高さ三尺許りで容姿は極めてよく、顔は圓滿で眉は特に長く

眼鼻等は稍や小さいが、それらが引き締つて顔の中に入つてゐるのは慈悲と威嚴の相をよく表はしてゐる云々として寫真により全體の彫刻の細部に互つて説明し、要するに此の像は藤原時代の作で、大體菅公時代のものであると思ふ。併し之が菅公の自作であることは信ぜられぬ、菅公が寄附したものであるかも知れぬ。之を聖林寺及び法華寺の觀音像と比較すれば聖林寺のものは身體が大きくして容姿は雄々しく、法華寺のものは姿は優麗であるが面相が男性的である。然るに此の道明寺のものは姿も顔も女性的であつて、而も爛熟した女性の容姿である云々

●京都帝國大學國史專攻學生河内
和泉方面研究旅行

本學史學科國史專攻學生三十名は六月一、二の兩日に互り、三浦教授西田教授中村助教に率ゐられて河内、和泉方面に春期旅行を企て、社寺舊家の古文書、美術品其他の史料を調査した。

六月一日。午前六時五十六分京都驛を發した一同が長野の停車場に到着した時には、出發の際氣づかはれた雨

が既に降り始めて居た。九時半觀心寺につき、桃山時代の建築で、面白い欄間彫刻のある書院で永島住職の迎接を受けた後本堂に於て住職の鄭重な儀式が行はれ、やがて現はれた本尊如意輪觀音を始め愛染明王、不動明王、地藏菩薩等の諸像を拜した。其優秀なる作品は美術愛好者を満足せしめるに充分である。本堂及び觀心寺勸錄資財帳その他の什寶を藏する寶物殿を見て後、檜尾陵を拜し再び書院に歸つて繰りひろげられて居る古文書に群つた。如意輪觀音愛染明王不動明王を今しがた拜した目には更に觀音の像が火中に存した奇特に關する興國五年六月の後村上天皇の繪旨を始め楠木正行の自筆書狀、四條隆資の自筆繪旨添狀、愛染明王安置に關する正平十五年正月十八日の後村上天皇の繪旨、東寺長者の御教書、弘法大師作不動寄進に關する元弘三年十月二十五日後醍醐天皇の繪旨翌日の日付の楠木正成の自筆書狀等を特に興味深く讀み耽つた。その他數多くの繪旨や楠氏累代の眞蹟等は活版本とは違つた生彩を以て吾等にせまるを覺えた。午餐後もミ來た道を停車場へミ引返し、午後一時三

十分一行が堺東驛に降立つた時は雨は過ぎ去つて日の光さへ雲間をまれて居た。堺市を横切つて南海本線の堺驛より乗車岸和田に着き久米田寺を訪うた。こゝでも數多くの古文書の繰繰けられたのを読み耽つた。

寺前に廣々清らかな水をたへて居る久米田池こそ當寺建立の基であるだけ此池を修固して農業を勵ましめる文書はかなり見出された。後醍醐天皇以下南朝諸帝の論旨は當寺が如何に朝用を辨じたかを示すもので、先述の農業に關する文書と共に南朝の經濟的支持に努力せる當寺の功績を偲ばしめる。こゝにも南朝の忠臣殊に楠木氏代々の手跡が多く、北畠親房、新田義興の眞蹟等南北朝時代の研究に取つて必須のものたるは言ふ迄もない。

寺を辭して後堺に引返した一行は海岸に立つて港灣の沿革につき牧野信之助氏の説明を聴き旅館一力樓に着いて一夕の團樂に疲勞を忘れた。一行は當地の考古家前田長三郎氏より天保年中泉州堺築港圖阿古夜復摺本、平野利兵衛氏より明治二十七年版堺名所案内、堺市より堺市地圖の寄贈を受けた。

六月二日。五時起床、三々五々うちつれだつて歴史的に有名な堺の魚市を見學したが、其活氣にみちた光景はそゞろにありし日の堺の殷賑を偲ばしめるに充分であつた。

八時に宿を出で十數町の道を初夏の強い陽光を浴びながら百舌鳥耳原中陵に歩を進めた。勝田陵墓監の歡待を受けた後肅々として第一堤防の東南隅に至り、壕を隔て、陵を拜し青木齊治氏の説明を聴いた。歴代の陵夷は以て尊王論の消長を跡づける事が出来る。

次に一行は堺第一の禪刹南宗寺を訪れた。天文五年後奈良天皇の大德寺住持職の論旨、同十九年佛印圓證禪師賜號の同天皇の宸翰、大林和尚遺偈、同自贊畫像及木像、三好長慶山名豐國畫像等は天文版論語の版木八十七枚と共に、堺を背景とする中世の文化的活動を偲ばしめる。坐雲亭と稱する鐘樓は秀忠、家光二將軍が登臨して茅渚の海を賞したと云ふ傳を有つものである。利休好みの茶室實相庵に於ては一行の爲めに當市の茶人正井一庵氏等の好意に依る茶會が催された。境内にある牡丹花宵柏、紹

鷗、利休の墓に展じて大安寺に赴く。此處では小學校の教科書に「畫工の苦心」をして有名な傳永徳筆各姿體の鶴の榎枝添之松及藤の榎、呂宋助左衛門の傳説の遺蹟遺物を見、次に發光院を過ぎつて其昔邇羅安南地方の貿易家であつた具足屋將來の銘ある佛像を鑑賞し、正法寺に急ぐ、本堂に列べられた諸史料の内、すばらしき大幅の暹羅將來の佛畫は發光院の佛像と同様南亞の色彩いゝ濃かであつて、寛文元年辛丑年八月二十五日の裏書にはこの佛畫寄進縁起の作成衆生禮拜に關する事が細叙されて居る。文書としては、燒失して今はない引接寺から引繼げるものや河内西琳寺の大政官牒杯がその中重要なものである。別室には、前田長三郎氏の蒐集にかゝる當地の出土品が目を惹く、堺市より午餐の饗應を受けた後養壽寺へ向つた。こゝには元信、宗達、永徳筆を傳へられる芳野山櫻花満開の圖、源氏舞の圖、本堂の戸にある俵屋派の虎の圖、鹿を紅葉の圖等があるが、養壽寺法式寫諸色改記録によつて考ふるも寛文を餘り上らぬ時代のものと思はれた。こゝを辭して、堺市中で最も多くの古文書を有する唯一の

式内社開口神社に向つた。當社の所藏は繪卷文書器物の外、堺市役所より特に一行の爲に持來られた元祿二年の堺大繪圖並に南蠻屏風の寫を見た、國寶大寺縁起繪卷三卷は土佐光起の筆に成り元祿十二年關白近衛基熙の寄進したもので親王及び公卿二十五人の詞書がある。數多き古文書のあるが中に特に興味あるものは文治三年三月三日尼好惠相傳の所領の寄進狀であつて、これには指判を見る事が出来る。形式的にはなつてゐるが珍らしいものである。その他後伏見院宸翰御製外題忠烈公御筆伊勢物語、舊記等も注目に値する。堺市役所所藏の大繪圖は久間丹後守の時の實測圖で、各戸の區轄まで正確に實測されて居り、其戸數より廣狹迄が一目に見渡されて得る處が多い。市の東部には織豊時代からの計畫によつて寺を集め堀以東の農民をもその區域に住居せしめ所謂寺町を造り、市の中央部には大寺(開口神社)を置きその境内を今日の公園の様に造りなし、更に市の東南數町の處には穢多村を隔離せる事等が示され、當時としては頗る進歩した都市計畫が斷行されて居た事を知り得る。同じく

市所藏の南蠻屏風の原本は大正十二年の關東震災火災に失はれたと聞える、貿易時代の堺の正確なる縮圖として貴重のものであらう。

こゝで堺市大島助役の一行に對する挨拶があつて最近其一部を完成された堺市史を供覽された。次に當地の舊家半井氏を訪れた。中世に醫を業こされた丈に醫學に關係深い史料が數十點處せまきまでに陳列されて居る。有名なる醫心方ミ醫書大全ミは其隨一である。曲直瀬道三自筆の醫工宜慎持之法も注意に上つた。寛永三年二月二十八日自讚和歌のある云也ト養の畫像、寛永十四年江月の讚あるト養夫人の畫像、慶長三年玉仲の讚ある宗英の畫像元文二年東郊齋筆の曲直道三畫像（これは永徳の圖したもの、模寫）等の畫像あり、島原陣中よりト養に送れる有馬忠卿の書翰一卷、出家でありながら醫業をなす事の不可を難するの澤庵の書狀、寛永十六年の宗及五十年忌の江月香語等がある。半井家領地京都大原郷人別帳六冊は經濟史家の省るべきものであらう。五時半井家を辭して蘇鐵の庵ミ土佐藩士の切腹ミによつて名高い妙國寺

に向ふ。方丈に於ては靈元天皇御製宸翰三好實休の畫像實休の戦死を悼んだ三好義長の書狀、羽柴秀吉の書狀、同人の渡海朱印、開山日珖上人自筆の己業記、同行功部分記、寶物集を閲覽した。己行記は永祿四年より天正十三年に至る上人の日記でその間堺の狀況を知るものも少くない。永祿四年、天正十三年の日記には、かの安土問答ミして知られた天正七年五月の安土に於ける淨土宗日蓮宗の争の爲に惹起せられた上人の法難の消息を物語るものがある。史料の閲覽を終つて後本堂前なる「土州英士切腹碑」を見、西宗真（ルイス）の菩提所本受寺に至る。本堂にては宗真の家康より拜領の衣裳、寛永二十一年の宗真由緒書一卷、慶長十二年六月同十七年八月の西頼子宛の渡海朱印を展觀した。やがてこゝを辭して最後に大和川畔の大和川染工場に向ふ。本工場は當地の舊家柳原家の經營に係る。同家はもご屋號を具足屋さいひ世々兵衛ミ稱した。近世の初期に於て安南暹羅の貿易に従事し、現に安南フェーリーの共同墓地には其先代で同地で客死した文賢の墓がある。一行は階上の一室に陳列さ

れた。其碑の寫眞、拓本を始め明治初年までの史料を見た。暹羅渡船免狀寫、渡來當時の種子島鐵砲、家傳妙方

藥種鑑札、五代次兵衛に關する書、十二代(孟文)が、堺に迎へた趙陶齋より送られた謝辭、香積寺京順和尚の像公家各宮家との取引支拂金に關する文書、十二代次兵衛自筆の糸割符申合控、將軍家茂の肖像とその乗船久上丸(或は天上丸)を併せ繪ける懸物、同將軍塚への乗船順動丸の繪等がある。かくして旅行の全程を終り、一行屋上に初夏の夕の薰風にひたりながら、眼前に展開される遠近の眺望に、二日間の追憶を語り合ひ薄暮歸途に就いた。稿を結ぶに當り今回の旅行に關し、到る處多くの便宜を與へ、種々の好意を寄せられた各位に對して深甚の感謝をさしける。(吉田)

●京都帝國大學 地理學教室修學旅行

地理學教室の本年度春季修學旅行は、石橋教授引率の下に、去る五月二十五日より六日間、紀伊半島沿岸に行はれぬ。參加せるもの教授以下十名。爰に旅行中見學したる事項の概要を記し、一は以て報告に代へ、一は以て

一行の備忘に供せん。

五月二十五日 土曜 晴

前夜來氣遣はれたる小雨は朗らかに霽れ、勝浦行急行船に乗り込みし時、爽かな初夏の濱風は心地よく我等の頬を撫でぬ。嘗ては險路に幾日の困難なる旅杖を續け、或は波濤の弄ぶ小舟に苦しみしならん熊野の旅路も、今や日々千六百噸の最新式ディーゼル船の就航する所こはなれり。我等の牟婁丸が相圖の笛の音と共に天保山棧橋を離れたるは正に午後二時三十分。甲板上に陣取りて次第に遠去り行く工業都市大阪、完備せる築港を見やれば既に先生は我等に其の説明を始めらる。早くも右手には地壘島淡路が視野に入り、左手大阪灣工業地帯の薄煙糺糊たる中には和泉山脈が其の姿を表はす。紀淡海峽陥没の遺物たる友ヶ島を過ぐれば、切斷されたる和泉山脈の末端が突兀し露出して紺碧の海に其の影を落す。其の間加太灣を抱いて山麓に密集せる加太の町を見送れば、海岸は再轉して紀ノ川口の砂濱に出で、彼方には夕陽に白く輝く和歌山城は古き昔を物語り、林立する煙突は現時

の和歌山の發展せる所以を示す。

夕日西山に春かんこして展望自由ならず、船長の好意に依つて最上甲板の前頂部なる操舵室に至り、海圖を前にして航海及び沿岸の状況、潮流及び其の早さ等に就き説明さる。終りて各自の連發せる質問に懇切なる回答を受け、海員特有の言葉に感興を催しつゝ、既に夜の冷氣迫りたれば一同船室に引揚ぐ。

爽かな天氣に幸されて豫定通り、十時船は田邊の文里港に着き、直ちに傍らに待つ湯崎間を連絡するランチに乗る。あたかも土曜日に當れば、阪神よりの湯治客は既に狭き船室に満つ。約三十分にして綱不知に渡り、乗合自動車にて今宵の宿舎有田屋に至る。此の宿には大正十三年屋敷内の試錐によつて掘り當てたる有名な不惑間歇溫泉あれども、當時は休止の状態なりき。内湯に一浴の後食事を終へ寢に就かんせし時、時計は既に十二時を示せり。

二十六日 日曜 晴

旅寢の夢は早く破れて、未だ五時過ぎと言ふに早くも

起き出でぬ。海岸傳ひに西北行すれば、路傍に元湯を稱せらるる古き泉あり。道盡くる處斗出せる山崖は即ち先の湯の在る所にして、滾々湧き出づる湯は天然の砂岩の浸蝕されたる凹處に湛へられて浴槽となり、最も古き原始的の湯なり。此等は第三紀層下部厚砂岩の裂罅より出づる炭酸泉にして、浪打際に沿ひ泉脈は西々北東々南に走り、又別に西南東北の泉脈二條あり、古く日本書紀齊明天皇條以降屢々史に見ゆる牟婁溫泉にして、今は丘陵地の麓傾斜地に階段的に密集せる旅館に多く内場として引かる。

砂岩頁岩の互層より成る小丘を越ゆれば、平地乏しき此の地方に於ては、丘上の土地も良く耕されて麥畑となり、除蟲菊の栽培も亦盛なり。數町にして三段の斷崖より成れる三段壁に至る、第三紀の砂岩にして節理の發達頗る著し。其の東に在る千疊敷には約二十米の高さに海蝕の痕跡認められ、地史上最近に此の地方の隆起せしを暗示す。

宿に歸りて朝食をすまし、濱邊傳ひに北して白良濱を

横ぎる。石英質砂岩の崩壊して成れる微粒の白砂は、初夏の日の直射を受けて皎然眼を眩するが如し。滴る緑の一段と映ゆる松林、藍碧の海原より寄せ来る磯波の白く碎けて銀沫を飛ばす好風景に加へて、南々東北々西の方向を有する新たなる泉脈の發見有り。海中に湧き出づる銀砂湯は即ち舊泉脈との交點に掘り當れるものにして、湧出量多く今白濱館の内湯として引かる。斯くて此の附近に旅館も増築され、近時温泉街として著しく發達せり。見やれば前面の海洋中には柔かき第三紀の礫岩及び砂岩より成る高島の、絶え間なき波浪の浸蝕作用に依つて碎かれ、中央に一大洞穴を作れる所謂圓月島在り。

山を負ひ海岸に沿つて細長く聚落せる瀬戸の漁村を過ぎ、砂岩質岩に或は大きく或は小さく無數に刻まれし海蝕の跡美しき洞窟を見つゝ、海岸傳ひの新道を行けば、やがて本學理學部の臨海研究所は巨大なるタンク、隱顯する赤屋根より其の姿を現はす。近海は沈降海岸の原形を示し、暗礁頗る多くして藻介類豊富なれば、大正十一年に創設されしものにして、幕末紀州藩の與方が異國船を

見張れりと言ふ番所ヶ崎の東、所謂桔梗平の上に在り。此の日宛も聖上行幸の前なりしかば、多忙なる處を案内されて一巡見學を了へ、數々の海藻類貝類魚類の標本に眼を見張らし、且つは其の設備の整へるを羨望す。寄宿舎にてお茶の接待を受け乾きたる咽を濕して、北側の濱邊より岡本文學士の用意されし發動機船にて綱不知に着く。

海岸の旅亭にて晝辨當を喫し、再び小舟にて東北約一三杆の海上に横たはる細長き島島の西岸に渡る。巻貝二枚貝の化石露出し、第三紀の砂岩より成れり。極めて低平なる岩盤には海波の大なる礫を振動せしむる削剝にて無數の凹穴を生じ、宛も干潮時にして其處に水残り處々眞紅なる珊瑚類の附着せるを見る。或は脆弱なる砂岩の岩壁が海波の爲め美しく波形に彫刻されたるもの、殊には波打際の砂が固まりて成りし天然記念物たる「漣痕」に厭かず見入りぬ。

舟に戻りて舵を東北に向け、綠樹鬱蒼と繁茂せる神島を左に見て文里港に上陸す。昨夜船を捨てし港なり。近

時埋立して成れる築港にして、灣内暗礁多く沿岸中入港に際し最も操舵に苦心する處なりと言ふに、直接岸壁に着きたる又故あるなり。之より坦々たる大道を田邊に陸行し、途中に砂岩が其の層理に沿ひて崩壊せる天然橋を見る。漁村磯間に通ず道路は此の下を走れども、嘗ては

波濤の浸蝕に遭ひしを知る。低廉なる勞働あるが故に設置されたる神子濱に近き貝釘工場を見、山麓に在る地震研究所の地塊傾斜觀測所を見學して、背後なる第三紀の丘陵上に登る。會津川左岸に占居し流域を其の背域とする田邊町は、近時濕地を高め東南へ發展しつゝあり。文里港開設と共に此の方面の交通至便となれるが故ならん。鬮鷄神社の裏に下りて社に參拜の後町の内部を見る。町内の道路は總て丁字形にゆきつまり、兎もすれば行き迷ふ。これ古き城下町の特色を猶示すものと言ふべく、現時に於ては頗る不便なり。町は海岸傳ひに熊野に通ずる大邊地ミ、東して山越に熊野に通ずる中邊地ミの交會點に當り、海陸交通の便備はり地方商業の中心地たり。従つて市街も相當殷賑せり。夕食を終へて會津川河口近き

左岸に城址を訪ひ、夕闇迫れる濱邊の松林に憩ふ。古く牟婁港として知らるゝ田邊港は次第に夜の帷に包まれ、我等も海岸傳ひに文里港に戻り、十時發の急行船に乗りて今夜の夢を船中に結ばんとす。

二十七日 月曜 晴

午前三時串本に着く。港淺ければ長さ一町許の棧橋あるにも拘はらず其處迄渡船にて渡す。夜中に加ふるに波高く、女子供の渡船に移る様子哀に見ゆ。屋號を記したる宿屋の提灯等持ちて迎ひに来れるもの多し。岸に旅館軒を列ぬるも港町らし。暫し夜の明くるを待ち、朝食をすませて直ちに潮岬に向ふ。凡そ八十米の高距を有つ潮岬の海蝕臺地へ急坂を攀つれば、串本の町は一望の中に見下さる。臺地を本土に結ぶ幅五百米長さ約九百米最高九米のトムボロが東方に緩斜せる上に在り。更に東北方には怒濤の浸蝕に耐へて屹立し、串本港を限つて打ち並ぶ一連の石英粗面岩の岩脈、橋杭岩を見る。

表面殆んき平坦なる臺地の上は灌漑水の不足より畑となり、既に刈り取られたる麥畑の續くもさすが南國なり。

四周に於て開折を受けたる深き小谷のみ僅に水田となる。臺地上の民家にては、約十五米の深井は良好なる飲料水を供すれども、何分水に不便なれば日常の用水の爲めに雨水を樋にてタンクに導きて貯へ、又萬一の場合の備に供す。東風東南風或は冬季に卓越する西北風強き爲め、家は低く瓦はセメントにて離れざる様に固め、高き石垣或は中には生垣を以て圍み、遠方より見れば僅に屋根のみを認む。主に臺地を耕作する平松、上野の聚村を過ぎ、新に擴けられたる幅十三尺の垣々たる道路を行けば、盡くる所にそゝり立つ純白の大石塔は即ち燈臺なり。潮岬燈臺は明治六年の建設にかゝり、同十一年に石造に改築せり。高さ七丈六尺、直徑二丈八尺、其の光芒は十九裡に及ぶ。寄せては返す太平洋の怒濤に削られし約二十米の絶壁に臨み、航海者に確なる目標を與ふ。目路遙かなる紫紺の黒潮の上に、折柄二、三隻の大型貨物船は濛々たる黒煙を吐いて、行き交ふ。内部の見學を許されざりしかば直ちに引き返し、其の東の岬角に潮岬無線電信局を訪ふ。此處は幕末船見番所の在りし所にし

て、明治四十一年逓信省の管下となり、電信局の設置は同年七月一日にかゝる。中空に聳ゆる百五十尺の大鐵柱二基は南北に三百尺を隔て、建ち、其の通達距離は晝間四百五十裡夜間千三百裡に及ぶも、本局の通信區域は東は伊豆の神子元島より西は鹿兒島北は神戸より南は南洋諸島に至る範圍を定めらる。此の附近の隆起海蝕臺地は俗に望樓の芝と呼ばるゝ翠の毛氈を延べたるが如き美しき芝生を作り、其の海に終る末端十數米の斷崖に望む處は實に本州の最南端にして、我等一行は沖より吹き來る海の氣を心ゆく限り吸ひて暫し此處に憩ひぬ。

歸途上野の茶店に寄りて乾きたる咽を濕ほし、若き頃南洋に働きたりと言ふ主人より、土地の資源に恵まれざる此の地方住民の海外出稼ぎの話を聞く。既に晝近くなりしかば急ぎ串本に戻りて晝食をすまし、午後一時四十分の汽船出帆迄町を見る。

潮岬半島の地頸部に在る串本は東西兩側に港を有するも、東方は前面に大島在りて自然の防波堤をなし表の錨地となる。町の地理的位置良好なれば此の地方の物産は

概ね此の地より出入し、従つて地方的商業の中心をなし市街も殷賑せり、憾むらくは港淺き缺點あれども漁港として勝れ、漁家は商戸に次ぎて多く沿岸に聚落し、鮪、鰯、鯉、鮫、飛魚等の漁獲多し、廣き魚市場や餘多の小規模なる加工場もありて、節類、鹽乾の産類も亦少なからず。

攝陽商船の沿岸汽船は僅か四百噸餘りの小型なりしが此の日甲板の歩行に少しく不自由を感ぜしうねりあるのみにして、無事豫定の如く午後四時勝浦港に着きぬ。

熊野灘地方に強き災害を與ふる東風を長さ一・七籽の自然の防波堤をなす長角にて遮り、前面に中ノ島を控へ港内波靜にして而かも水深大なる勝浦港は、南紀一の良港をなし急行船は此處を其の終點す。又近海に活躍する漁船の根據地たり。此の地より鐵道新宮に通じ那智及び熊野參宮の門戸をなす。訪ね度き温泉もあれど前途を急ぐ一行は先づ那智に向ふべく、直ちに自動車をかつて那智川に沿ふ中邊路を北進す。市野々の散村を過ぐるに、民家は海岸を去るに従つて經濟狀態を反映し次第に

貧弱となり、三間二面の切妻作りにして石を載せたる杉皮葺多し。

「あれ見よ」こ指すを見れば、素練の中空より落下するが如き那智瀧は漸く其の雄偉なる姿を眼前に現し、思はず我等をして快哉を叫ばしむ。近づきて見るに石英粗面岩が節理に沿ひて崩壊せる爲め生じたる斷崖に懸り、熊野灘沿岸の多雨地方を水源すれば、其の水流極めて旺盛にして山谷爲めに鳴動す、直下八十餘丈、巾約二丈、方一町許の瀧壺に落ちて水烟を四周に散じ頗る壯觀なり。

西して兩側の老杉鬱蒼たる間の急坂を登るここ凡そ六町、西國巡禮三十三番札所の第一番たる青岸渡寺に詣づ。十三間四面の大堂を始め鐘樓寶庫等之に傍ひて奥床し。次に其の南に隣る熊野夫須美神社を拜す。即ち那智神社にして今官幣中社に列す。十二所拜殿、神庫樓門等皆備り、嘉永四年の重修にかゝる。

再び自動車にて引き返し熊野街道を新宮に出づ。大邊地に出でし頃日既に暮れ、八時頃今夜の宿舎たる宇治長

旅館に着きぬ。

二十八日 火曜 雨

早朝起き出でしに意地悪く降り出したる雨は漸く其の勢を増し、神倉山に登りし時既に下半身は濡れ風となりぬ。山頂は熊野速玉神の舊座所を傳へらるゝ所、天磐盾を稱せらるる巨石在り。毎年行はるゝ火祭は頗る壯觀なりと聞く。

願れば新宮の町は眼下に在り、洋々たる熊野川右岸の段丘上に、今丹鷓公園なる城址を中にして、山麓より川口迄延ぶ。紀和山地第二の大河たる熊野川の流域を其の背域とし、川を下る筏の集散地にして、實に熊野の中心として發達し紀州第二の都市たり。大邊地に沿ふ所を其の最も繁盛せる所となす。暫くにして下山の途に就き、鎌倉時代に造られしと聞く極めて不整備なる磴道に幾度か足をすべらしつゝ、漸くにして下り、町を通つて河原に出づ。珍らしきバラックの店が船の乗場近く迄兩側に密集せるを見る。これ、「あがりや」と稱せられる三間四方の低き石を載せたる板葺板壁の簡單なる小舎なり。

町に店を有つ商人も、上流地方の村人や筏士船頭を買客とすれば、船に近く運搬も便なる此處に其の出店を設くものにして、交通と商業の關係の如何に密接なるかを示す。一朝洪水の時には此のバラックをこりはづし家財と共に山手に運ぶと言ふ。聚落の季節的移動の極めて特殊なる一例なり。

略南北の構造線に沿ひて流下する熊野川は、其の作る溪谷狭く懸崖相接し水流頗る急にして、下流地方に普通見るが如き平野の展開なし。加ふるに山嶽重疊の中に通ずる陸路は道路悪しく山坂多ければ、所謂諸手船の形式の進化せる小船に飛行機のプロペラを利用して川を走る有名な飛行艇は、奥地唯一の交通機關をなす。午前八時の第一便に乗り込みし時は既に満員の状況にて、剩へ雨に閉ぢ込められて展望も自由ならず。船體は動搖し加之爆音は耳を聾し辛じて筆談を以て用を辨す。

窓外を見れば兩岸の石英粗面岩は柱狀節理の發達せる爲め、所々殆んき直立の懸崖あり。かゝる上の僅かばかりの傾斜地も驚くべき程耕され、此處彼處に民家の散在

せるを見る。怪速力にて飛沫をあけて進む舟は、翠綠滴るばかりなる斷崖に白布を懸けたるが如き雪瀧水谷瀧等の大小の瀑布或は鈞鐘岩猪岩等の巨岩の前にては速力をゆるめ説明しつゝ行くに、やがて淨瑠璃の三十三間堂棟木の由來に聞ゆる楊子樂師を過ぎ、右岸に嘗て有名なりし熊野炭坑を見送れば、須臾にして九重村出會に着く。即ち十津川と北山川の會合點なり。本宮行は此處より乗り換へて十津川を溯れども、一行は先づ北山川を溯つて海峽を訪はんぞ。進むに従ひて次第に川の屈曲甚しく峻壁列なれるは、中生層中の頁岩が接觸變質を受けて成れる極めて堅き黒色硅板岩並びに灰白色の硅質岩の厚層在りて浸蝕に抵抗すればなり。やがてエンヂンの音止りて舳手は海峽に入れるを告げぬ。即ち小雨を冒して室外に出づるに、稜々たる直立の柱狀節理は宛ら屏風を立て列ねたるが如く、底ひ知れぬ碧潭に其の裾を没す。水の深さ二十五尋に及ぶと聞く。これ元は此の堅緻なる岩石が頑強に浸蝕に抵抗して懸崖を作り、一大瀑布之に懸りしものにして、今の深潭は即ち其の瀧壺の跡に他ならず。

女男岩、辨天岩、獅子岩或は虎岩等こゝ々説明されたれども煩しければ省きつ。

上瀨の一巡も終へて山間の旅亭招仙閣の前に暫し舟は止まる。茶店より茶を貰ひて、携帶の晝辨當を喫し、再び瀑音にて峽谷の靜寂を破り、急速力にて下る。出會より折れて熊野川本流を溯る。今河床の頗る淺きは舟底に激する岩の音によりて察せられ、少々氣味悪し。撞木山の勝景を眺めやがて本宮の河原に着く。舟を捨て、北すれば道の右側に鬱蒼たる森あり。これ元本宮のありし處なるも、かの明治二十二年十津川筋大洪水に際し神殿蕩盡し、民家も亦皆流亡するの災害に遭遇せり。依つて社を祓戸に移し再興されしものが今の熊野坐神社なり。官幣大社に列す。平入の神明流造には熊野牟須毘神速玉男神を祭り、妻入りの熊野作り兩殿には家都御子神天照大神を祭り奉る。神域の神々しさ云はん方なく自ら頭の下るを覺ゆ。もこより僻陬の地淋しき鳥居前町を過ぎて舟に戻りしに、相客は多く湯の峰温泉に行き終航なれば村人の新宮に出づるもの少く、幸にもゆつくり舟中の人こ

なるを得ぬ。奔流に乗りし舟は愈々早く午後五時早くも新宮に歸り着けり。

成川の渡を渡れば即ち三重縣なり。宿より持ち來れる荷物に辨當こを受け取りて此處より自動車をかり陸路木本に向はんこす。海岸には小砂利の砂濱が續き、崎幅たる山道を特色とする紀伊半島の沿岸に於て見るここの極めて稀なる廣くして平坦砥の如き道路が此の直線狀の海岸を通ず。沿道の松林は疎密の差こそあれ連續して絶えず、砂丘帯の内側に往々小湖を見る。砂礫により壅塞されて生じたる瀉なり。松林の間街道に沿ひて街村の型式をみる井田、阿田和、萩内、濱等の村落を送迎し口有馬を過ぐれば、再び石英粗面岩の海中に突出して岬角を作るに會す。海蝕の跡著しきもの多く、時々車を止めて見る。井戸川の河口近くに在りて、浩蕩たる太平洋に向つて宛ら咆哮せるかの如き獅子岩は、其の最も雄なるものたり。長き夏の日も將に暮れんこする頃木本に着きしに、如何せん此處より午後七時乘らんこする汽船は荒天の爲めに缺航すこ言ふ。一行は豫期せずして此の地に一泊す

るここ、なりしも詮なし。

二十九日 水曜 晴

時雨がちなりし夜は早く明けて南國の日は麗かに照り出しぬ。恵まれし日和を感謝しつゝ、八時出帆の巡航船の乗場に行けば、前日來の波高き爲め午前の船は缺航すこ。又もや圖らずして此處木本の町を一巡するここを得たり。先づ町の背後に屹立する花城山に登り木本町を展望す。町は南牟婁郡の略中央を占む地理的位置の良き爲め、和歌山藩治の時代にも官所を置かれ今も郡の中心地をなす。縦横に交又する市街も廣く商家連り都市的なる發達を示す。目醒むるばかり濃き緑の樹々は無數に點綴され、如何にも南國の都邑にふさはし。町全體が甚だしく井戸川沖積平原の東に偏するは、即ち五百米許海中に突出せる鬼ヶ城の岬角にて東風を遮り、其の裏蔭に港在るが故にして、此の地方に於ける海上交通の重要さを物語れり。山を下れば我等の立ちし海拔約六十米を有す岩角の下には美しき海蝕の跡認められ、地形變動の著しきここを想はしめぬ。山麓に橋南谿が秦徐福を追懷して詠

める詩を刻す文字岩を見て、町を過ぎり海岸に出づ。沿岸には漁家多く、蜿蜒たる高き防波堤にて圍はれたるも更に高き波の日あるを想はしむ。一面に石英粗面岩、黒色硅板岩、灰白色の硅質岩の礫より成る海岸傳ひに東北行して鬼ヶ城の岬角に至る。此處は全部が頗る堅質なる石英粗面岩より成り、其の先端には太平洋の怒濤に噛み砕かれし見事なる數十個の波蝕洞窟群あり。海波の反撃運動によりて穹窿状をなす天井は高さ約十米に及び、岩石は割目なく堅き故に弓なりに前へ垂れ下れる前端の原形は良く保存さる。廣き洞窟の床は二米乃至一・五米の間隔をもつ階段をなして海に没す。これ土地が間歌的に突然隆起したるを證するに他ならず。

狭き木本の町には他に見るべき重要なものなし。町にて晝食をすましたる一行は港の砂濱にて船を待つ。砂礫の濱は車を通せず、物食は總て女の頭にて運ばる。木材を始め二米もあらんかと思はるる大鯖さては米一俵に至る迄、さも輕げに運び行く姿は我等をして驚異の眼を見張らせたなりき。暫ありて巡航船は入り來りぬ。礫濱は

船が、り極めて悪く渡船の便を藉らざるべからず。波高くして翻弄さるゝ渡船より船に移るのも一苦勞なり。名にし負ふ熊野灘を僅か二十數噸の小船にて渡らんごは全く豫期せざりし所なりき。交通止めに遭ひてより最初に出でし船たれば乗客意外に多く辛じて上甲板に横になり眼をつむりて搖らるゝに任す外詮方なし。船の動搖少くなりしと思へば早や尾鷲灣内に可成り入りしなり。

尾鷲灣は東に開きたれども奥深く灣入すれば海波靜かに、今も良港として沿岸航海に重きをなす。古き港町の面影を海岸通りに止むるを見て町に入れば、町並美しく街路縱横に通じ、商戸軒を列べ頗る殷賑せり。後背の平地廣く、苗木を植栽せる所多きも林業地にふさはし。此の附近は沿岸を洗ふ黒潮の影響によりて年平均十六度以上の高き氣温ミ年計降水量三千耗以上の雨量を惠まれ、植林事業極めて盛にして、滴る綠濃き扁柏、杉の人工の美林は心地よき眺めを興ふ。尾鷲は此の地方より伐り出さるる木材の集散地にして、後背の山林より港迄四、五條の鐵索を通じ盛に運材しつゝあり。町の西方に有名なる土井

の竹林を見る。氣候の影響にて竹幹極めて太く、日通り尺三或は尺五の巨竹も珍らしからず。歸途公園に登りて町を概観す。旅亭に夕食を了へて暫時の休息をこりたる一行は午後十一時二十分發の汽船にて志摩に向ふ豫定なり。

三十日 木曜 晴

黎明、紅白に明滅する大王崎の燈臺を見て岬を廻れば、四時前と言ふに早くも上陸地波切港に着き、頂上約三十米の平な一線を描く先志摩の海蝕臺地は吾人の眼前に展開されぬ。暗礁多き先志摩の海岸は又しても渡船の便を借りて築港に入る。折しも港には今し鯉市の開かれたる時にして、鯉貝の音を合圖に尺餘の見事なる鯉は一面に並べられ頗る壯觀を呈す。近海を洗ふ黒潮は又魚類の餌料なる莫大の微生物を齎らし、従つて漁業盛に就中鯉漁は其の最も雄たるものにして町は斯業の一中心地をなす。波切町は港口の海岸より臺地上へかけて民家密集し道路も極めて狭し。風強き爲めに家屋は低く窓も亦少く海岸に面する所は高き石垣にて圍まる。民家概して小さ

く庭園を有するものは少し。貧しき漁家に至りては石を載せたる杉皮葺板壁のものさへ見受けられぬ。

清らかなる朝の空氣を胸一杯に吸ひて船越へし臺地の土を歩む。海岸近くには基盤たる中生層の砂岩泥板岩の露出を見しが、第三紀新層より成る臺地の上にては麥の穂の黄色き波は見渡す限り續き、所々に生ゆる疎なる松林が其の單調を破る。麥を刈り採れば芋畑とされ其の他馬鈴薯、夏豆、粟、きび、さゞぎ等極めて集約的に栽培さる。住民の主食物は従つて多く麥芋にして、水田は僅に小さき谷地に在るに過ぎず、有名なる志摩の饅婦は、かゝる陸の資源極めて貧弱にして、而かも海岸には暗礁多く其處に藻介類頗る豊富なれば、自然に發達したるものたり。

左に浩蕩たる太平洋を眺めゆるやかに起伏する臺地の道路を過ぐれば、海岸に出づる處に船越の聚落在り。所謂先志摩半島の頸部の小沖積地に位置し、英虞灣及び太平洋の兩側に面す、臺地上より飲料水を得るこゝ易く、従つて此處に人家密集し、村落内の街路亦極めて狭く、

古き民家は萬一の火災を恐れて土藏造りのもの多し、鏡の如く波靜かなる英虞灣は安全にして容易なる交通の便を與へ、農民は日々小舟にて耕作地に通ふ。折柄出づる巡航船にて耕作地に急ぐ小舟を縫ひ灣内を進めば、臺地上に小舎の見ゆるは即ち農具納屋なり。紺油を流せるが如き水面は行くに従ひて碧藍の色を増し、茶褐色の岩肌は青緑の臺地との境を縁ざり其の美觀云はん方なし。刻々に移り行く眺めを恣にするこゝ暫らくにして多徳島に着く。これ多年御木本氏の英虞灣に於ける眞珠養殖の中心地たりし所なり。嘗ての赤潮の襲來に、灣内の水温屢々眞珠の養殖に不適當なる七度以下となる恐ある爲め、今や其の本據は五ヶ所灣に移したれども、猶其の建物の廣大施設の完備せる、以て此の事業の盛大なるを察するに足る。眺望良き應接室に通され養殖事業の説明を聞き、パンフレットに繪葉書を貰ひぬ。所屬のボートにて鵜方まで送られ、自動車にて鳥羽に向ふ。鳥羽灣頭に聳立する日和山に登りて沈降海岸地形を展望し、午後三時十八分京都行の列車にて一行恙なく歸學の途に着けり。

此の行無事所期の見學を終へ多大の收穫を得たるは牟厘丸船長事務長御木本養殖所の寄せられたる好意、別して東道の勞を採られたる田邊中學の吉信教諭、新宮中學の高橋教諭並びに木本中學校長に負ふ所多し、特記して深謝の意を表す。(村松)

●須玖岡本遺跡發掘

筑前國筑紫郡春日村須玖岡本は吾が金石並用時代の遺跡として最も著名なるもの、一つであつて、銅劍銅鉾等の青銅遺物を始め漢鏡の數多を出土し該時代研究者の見逃す可らざる遺跡となつてゐる。此の地に於いて京都帝國大學文學部考古學教室は濱田耕作教授指示のこゝに同教室島田貞彦大學院學生肥後和男、史學科學生有光教一、京都醫科大學學生三宅宗悅氏等は去る九月七日以降約十日間に亘りて遺跡の臺地上約百數十坪を組織的に發掘し、合口甕棺十一個を出土し、甕棺の埋没状態を究明し得たるのみならず、其の一個の甕棺内より細形銅劍を發見するものがあつた。これ實に確實なる甕棺内遺物發見の嚆矢とすべく、考古學上貴重なる新資料を提供した

もの云へる。

吾人は一日も早く此の斯學上有意義なる調査報告の公開せらるゝ日を待つものである。

● 讀史會

例會

六月二十一日午後六時より樂友會館講堂に開催。西田教授、中村助教授其他四十五名來會。左の研究發表ありて十時半散會す。

天保度に於ける薩藩の財政政策

下園 盛治君

維新の大業完成の中心をなせる薩藩も徳川中期以後は六百萬兩の負擔を負ひ商人の前に手を突く程に窮乏して居た。然るに重豪以下歴代藩主の英邁はよく調所廣郷等の人材を登庸し、その建策によつて國內産業の振興を計る一方、或は支那貿易を通じ或は進貢を通じて琉球及び三島を極度に搾取する事により財政を立直した結果、弘化元年には五六十萬兩の積立金、萬兩の積米を得、天保の飢饉にも堪へ得るに至つた。云々。

本居宣長に就て

村尾

誠君

本居宣長が我古道を明かにし、復古思想・尊王主義を唱へ、而も幕府の忌諱する處ミならなかつた理由は那邊に求め得るだらうか。彼が經濟的に貧窮せず従つて當時の社會の客觀的な認識を缺きたるが故であり且己は商人の出でありながら、然らざる事を考證する位武士たる事を欲し、或は自覺さへした故に無意識の中に徳川幕府に對し服屬したるが爲であつた。さればこそ道を極める事は學者の任なるが、道を行ふは神にあり、自分等はそれに従ふのみ云ふ便宜主義的理論を唱へ、皇室中心主義の根本思想の究明に際し、徳川をさげ足利を用ふるに至つたのである云々。

武士の道義觀念について。

西田直二郎君

從來かゝる問題の研究は鎌倉時代我々の道德的行爲の事例そのものゝ例示によつて説かれたがそれは Morality を問題にせるので *Stichtheit* を理解する所以ではない。私は個人の勇武も、歴史的生活に關係さす事によつてのみ始めて理解する事が出来ると思ふ。倫理學が社會生活の前線に出るのは新なる社會關係の發生によるミカウ

ツキーの説けるが如く、鎌倉時代には倫理觀が社會生活の最前線に表はれた。戦人なる武士の倫理觀即ち道義觀は多數の中に正しきものあり云ふ集團的意識を其特徴させる事は、平安朝の歌合の判斷が家元の意見によるに對し、武士のそれは衆議による、云ふ様な些少な事柄の中に窺ふ事が出来る云々。

● 明治史研究會

第四回例會 六月十一日午後六時半より樂友會館に於て開催、三浦教授、牧助教等凡て十八名出席、左の講演を聴き十一時散會。講演概要次の如し。

眞政大意に就きて。

吉田 三郎君

まづ明治維新成立の政治、經濟、社會、思想的背景に就きて所見を述べ、加藤氏がこれまで新思想を鼓吹せる一團の人々を異り、直接に西洋思想を諒解し、之を説いたのは、彼の境遇の好適なりしによる云ひ、次で眞政大意の内容を解説し、前人の所説の往々理論と實際との齟齬せるに比して其の所説が首尾一貫兩者を兼備しよく新時代の新興階級の指導精神となつた點を力説した。

戊辰戦後の會津藩士に就いて。

布村 安弘君

明治元年九月若松落城後、政府に收容せる會津藩士の善後處分として、三年五月その一部を北海道に、また大部分を戸波田邊郷三本木原開墾のために移住せしめしが所期の目的を達するこゝを得ずして、六年歸郷を許し八年四月つひに解散のやむなきに至つた顛末を述べ他藩士の所謂金祿公債問題が早く解決せるに拘らず同藩士のそれのみが遷延して大正八年漸く解決を見たのは反政府的行動のために明治政府の對策が同藩士を各地に分住せしめた結果であるを説いた。

明治初期に於けるかくれたる貢獻者 三浦 周行君

若山儀一の手記によつて彼れが夙に生命保險業の必要を首唱し、初めは混合組織より、後には相互組織の生命保險會社たる日東保命會社の設立を企て、苦心慘澹漸く設立の認可を得たるも終に失敗に歸したが、生命保險業勃興の機運を醸成したから、此種會社の先驅たる光榮を荷ふべきであるを説かれ、次に彼れが明治政府に仕へては各種の新施設の立案者となり、野に下つては新學説の

紹介に力め實に明治初期に於ける隠れたる先覺者の一人であつて、其貢獻寄與するところの尠くなかつた事を表彰された。

第五回例會

七月二日午後六時半樂友會館に開催、

三浦、小西教授、牧助教等十二名出席、左記講演を聴き猶ほ明治時代の教育に就いて意見交換を行ひ十一時散會。

學問のすゝめに就いて。

赤松 俊秀君

學問のすゝめは著書福澤氏の政治、經濟、社會觀を説き何故に彼が學問をすゝめねばならぬか云つた根本にふれたものである、而して彼の説く所頗る多岐なるも要するに西洋文化の卓越を認め此を攝取して我國文化を向上せしめると共に實學をおこして有用の材を養ひ且また信念あるの士を養成するために學問をすゝむべきであり而も政府が斯る事業をなすは不便であるから國民がこの大事業を完成すべきであるといふにあつた云々。

David Murray の日本に與へた教育意見に就いて。

小西 重直君

明治五年駐米公使森有禮氏が米國教育家に向つて教育意見五ヶ條の質問を發する前後に互る米國教育發展の概況を説明せられ森氏の質問に對する解答者十數氏中モーレー氏の解答最も懇切にしてよく時宜を得たるものであつたことその一々に就いて説明批評せられた、氏は明治六年我政府に招聘せられ同十二年まで我國に留つたが其間教育制度の樹立施設の改善に貢獻する所のあつた跡を明かにされた。

會報

●寄贈交換圖書

鷄龍山麓陶窯址調査報告 (昭和二年度古蹟調査報告第一

冊)

堺市史(第一、第五、第六卷)

史苑 二の三、四、五

史學會々報 八

歴史地理 五三の六、五四の一、二

國學院雜誌 三十五の七、八、九

社會學雜誌 六三、六四

觀想 六〇

經濟論叢 二十九の一、二、三

史學雜誌 四〇の七

刀劍研究 一五の七、八

史蹟名勝天然記念物 四の七、八

東北文化研究 二の二

史料繪葉書

朝鮮總督府

堺市役所

立教大學史學會

神宮皇學館史學會

日本歴史地理學會

國學院大學

日本社會學會

觀想發行所

京都大學經濟學會

史學會

南人社

同保存協會

史誌出版社
名古屋史談會

龍谷史壇 二の一

史學襟志 一の三

考古學雜誌 一九の七、八

人類學雜誌 四四の七、八

龍谷大學論叢 二八六

伊豫史談 五八

民族學 一の一、二

商業と經濟 一〇の一

●會員動靜

●入會

京都帝國大學文學部史學科

東京宮内省諸陵寮

(右紹介者島田貞彦氏)

朝鮮平壤女學校

(右紹介者西健介氏)

●退會

藤田 至善氏 宮崎押一郎氏

●逝去

中村 忠氏 藤田 豊八氏

右謹みて哀悼の意を表す

龍谷大學史學科

南京中國史學會

考古學會

東京人類學會

龍谷大學

伊豫史談會

民俗學會

長崎高等商業學校研究館

徳丸 福藏氏

和田 軍一氏

山口 正元氏